

# Nコン2019 中学校の部 課題曲

「君の隣にいたいから」(混声三部合唱)

演奏のポイントについて 参考演奏指揮:辻 秀幸さん(声楽家・指揮者)

Q 練習で大事なポイントは?

辻: まず、中学生のときに(存在が)まぶしい友達とか親友っていたと思うんですけど、実は僕の友達っていつも学校のなかで一番のモテ男だったり、学年のなかで一番かっこいいやつだったりしたんですね。そういう人間と一緒にいる自分って、なんかすごく頑張っていたんですよ。だからそんなところを、このロックの、少しビートのきいた速いリズムにしっかりとって、決してその、あとから言葉がついていくような歌い方ではなくて、いつも「これをしゃべりたい(伝えたい)んだ、これをしゃべりたいんだ!」という人がしゃべり続けていくような歌い方をしていてほしいなと思います。

それで、このビートっていうのは、変わらないっていうことがすごく大事なんですね。ですから音楽表現によって、リズムをしっかり出すっていうことはもちろん大事なんですけれども、それによってテンポが落ちたり、それからまた妙に速くなったり、ということがないように、そういう練習を心がけてほしいと思います。

それで、いつも文章をセンテンスで(伝えるように歌う)っていうことをみなさん考えてコーラスすると思うんですけど、単語のインパクトっていうのがすごく大事なので、単語が連なってひとつの文章ができている、そういうイメージをぜひ忘れないでいただけたらと思います。

Q 中学生が言葉に気持ちをのせて歌うにはどうしたらいい?

辻: 合唱のときに言葉に気持ちをのせるときって、実はさっき言ったことと共通するんですけど、言葉を発しながら、その言葉に意味を持たせていくような歌い方をすることが多いんですよ。

例えば「優しい」っていう言葉を歌うときに、「優しい」という、その同時に声を出していくことと歌うことと、気持ちをのせるっていうことが同時なんですけども、この曲の場合はそれを、「優しい」って言葉を発する前に、「優しい」という気持ちと表情になることが大事なんです。「優しい君でも」というときにそれを作っていたんでは遅いし、それでは伝わらないので。だから、「律儀に傷ついてやる必要なんかないだよ〜」って言ったとたんに、もう「優しい」っていう言葉を表現する。そして、「優しい君でもね」っていう表現の、なんていうんですか、その移り変わりが、自分が歌うより先に欲しいんですよ。そうじゃないと、言葉っていうのがその音楽についていけなくなる、ついていけなくなるんですね。だからそのところを、うんと言葉をかみ砕いて、次にこういう世界が広がるんだってことをみんながわかりながら、しゃべって行って(歌って)ほしいと思います。

Q ノリよく歌うためには?

辻: このスピード感もそうだし、どんどんドラマが展開していくので、その展開していくドラマっていうのを、自分が主導的に動かしたい。合唱団みんな横一線になって、っていうよりは各人がちゃんとその言葉の意味を自分の中のドラマとして展開していかないと、全体としてのまとまりが逆につかなくなると思いますね。

あのmeno mossoの部分なんか(テンポが)緩むんじゃなくてむしろ濃くなる、イメージで歌っていただいて、そしてまたあのノリに戻る。スピードが戻るっていうのは実はものすごく難しいと思います。

Q 今回の課題曲で鼻濁音はどう意識したらよい？

辻: 実は今回、鼻濁音というのに僕はほとんどタッチしませんでした。

鼻濁音を言うことによって、なんかこう、そのストレートに言葉をしゃべっている感が薄れてしまって、ロックという、この音楽の流れとか言葉のしっかり感というかそういうのとちょっとそぐわない部分が出てきたような気がしたので、今回、ぼくのほうの混声(三部合唱の参考演奏)のほうでは、あえて鼻濁音という言葉に注意せずに(合唱団の)みなさんに歌っていただきました。

ですから、そのなんていうか鼻濁音じゃない、あえて鼻濁音にするなどとも言っていないんですが、その辺を味わっていただければいいかな、と。もちろん個々の学校の在り方で、その鼻濁音の処理、ちょっと頑張ってみてください。

ふだん、だから、どのくらいの鼻濁音というのを会話で使っているか。歌う時にはものすごく使うんですね、合唱やっていると。だけど、ふだんの会話でどの程度、鼻濁音というのを意識しているか？ それを逆に、この歌に生かしてもらえるとありがたいかな、と今回、僕は思いました。

### 中学生へのメッセージ

(参考演奏の練習で)SHISHAMOさんと話をさせていただいたときに、この彼女たちの原曲っていうのと、この合唱曲に編曲されたことでなにか失われたものとかあるんですか?って聞いたんですよ。

これは(編曲した)加藤さんにはちょっと意地悪な質問だったんですけど、

そしたら彼女たちが「まったく別物です」という答えが返ってきました。

まったく別物なんだけど、言いたいこと、目指したいことがまったくぶれてないし、私たちの言いたいことがそのままこの曲にはのっていた、合唱団の歌にはのっていた、

という言葉をいただいたので、そこを大事にしていきたいですね。

スピリッツみたいなものが絶対にぶれないで、伝わるということ。合唱曲になったから、こういう気持ちが薄れる、とか、あるいは変なところが強調されるとかっていうことではなく、中学生の等身大の言葉で、そのまま、みなさんの気持ちをそこにのせていただいただけるといいなと思います。